うむい

発行所
沖縄県護国神社
那覇市奥武山44番地
電話（098）857-2798

英霊の言乃葉

出発の朝「入隊に際して」

海軍少佐　古川　正崇　命

神風特別攻撃隊振天隊
昭和二十年五月二十九日
沖縄近海にて戦死
海軍第十三期飛行予備学生
大阪外国語大学
奈良県出身　二十四歳

二十二年の生
全て個人の力にあらず
母の恩偉大なり
しかもその母の恩の中に
また亡き父の魂魄は宿せり
我が平安の二十二年
祖国の無形の力に依る
今にして国家の危機に殉ぜざれば
我が愛する平和はくることなし
我はこのうへもなく平和を愛するなり
平和を愛するが故に
戦ひの切実を知るや
戦争を憎むが故に
戦争に参加せんとする
我等若き者の純真なる気持を
知る人の多きを祈る
二十二年の生
ただ感謝の一言に尽きる
全ては自然のままに動く
全ては必然なり

【平成二年十月靖國神社社頭掲示】

もくじ

宮司あいさつ……1
護国神社この一年……2
永代祭祀のご案内……3
私の戦争体験記……4
遺族からの手紙……5
平成11年度永代祭申込書御芳名……7
社務日誌抄……8
今に残る激戦の跡……9
皇居勤労奉仕に参加して……11
お知らせ……12
編集後記

表紙写真（安田淳夫氏撮影）
「平和の像」　三木勝氏による平和の鳩を放翔する少女の像と、伊藤龍松氏による「恒久平和」「慰霊顕彰」「共存友好」の題字刻銘からなり、「世界の恒久平和と戦争に係る思い出をいやすもの」として、平成７年９月終戦50周年を記念し、沖縄県遺族連合会により護国神社境内に建立された。

宮司あいさつ

又吉真興

終戦からすでに半世紀が経過し二十一世紀も目前に迫った去る七月、沖縄では世界のリーダーが一同に会する「九州・沖縄サミット」が開催され、先進七ヵ国の首脳とロシアの大統領が来沖しました。この会議が沖縄で開催されたことはとても意義深く、あらためて世界的視野から「平和」について考えるよい機会となったものと思われます。

十人のうち七人の日本人が戦争を知らないという昨今、「戦争」とは何か、「平和」とは何か、それを卓上の論理ではなく「実体験」でもって後生へと受け継いでいくことは至極困難なものとなりつつあると言わざる得ません。そして、それは戦争体験者や肉親を失われた遺族の方々の高齢化とともに確実に進行し、やがて消えてゆくであろうことは確かなことです。

このように新しい世紀を迎えるにあたり、今記録に残し後生に伝えていかなければならないことは山ほどあり、国を護るため散華された英霊を祀る護國神社の果たす役割は、今後さらに重要なものとなっていくことでしょう。

このような時勢のなか、当神社では英霊の声亡き声を顕現し、残された遺族、戦友達の思いを記録し、次の世代へと継承すべく『うむい』と題する機関紙を年一回発刊することとなりました。

この「うむい」という名称は、沖縄の方言で「思い」のことを「?umii」（ウムィー）と云うことから、戦争で亡くなっていった人達、そして遺族、戦友等の「思い」を残すという趣旨からこの名前としたもので、彼等の思いを伝え、真に戦争の無い平和な社会を築くべく編集していく所存であります。

日清戦争以後、敢然と国難に立ち向かっていった先人達の尊い精神が、この『うむい』を通して末代まで受け継がれていく事を念願するとともに、本紙発刊にあたりこころよく原稿掲載を承諾していただいた方々に対し、この場を借りて御礼申し上げ、発刊のあいさつとさせていただきます。

護國神社この一年

〔第四十一回秋季例大祭〕

平成十一年十月二十三日、第四十一回秋季例大祭が御遺族、崇敬者約千人の参列の下に斎行された。定刻の午後一時、大祭開始を知らせる太鼓の合図とともに祭典が行われ、斎主又吉宮司の祝詞奏上に続き、当神社代表役員古堅宗徳大祭委員長、沖縄県遺族連合会会長座喜味和則氏がそれぞれ祭文を奏上した。また、MOA山月沖縄支部より献華が行われた。

祭典には、靖國神社宮司を始め神社本庁統理、山口県知事、全国都道府県遺族会々長ほか全国各地から慰霊電報及び祭詞が寄せられた。

「大祓式」・「除夜祭」・「歳旦祭」の斎行

平成十一年十二月三十一日から平成十二年一月一日にかけ、「大祓式」・「除夜祭」・「歳旦祭」が斎行された。今年は西暦二千年にあたり、コンピューターの誤作動による電気、水道等の停止が懸念されたため、自家発電機や水タンク等を設置し万全を期した。

（特に支障なし）

また、大晦日から元旦にかけ御社殿前に設けられた特設スタジオから民放ラジオの生放送が行われ、多くの参拝者で賑わった。正月期間中の参拝者数は延べ約十五万人であった。

〔第四十二回春季例大祭〕

平成十二年四月二十三日、第四十二回「春季例大祭」が斎行された。「秋季」同様、約千人の遺族、崇敬者が参列し厳粛に祭典が執り行われた。

裏千家淡交会沖縄支部より奉茶が行われ、また航空自衛隊那覇基地太鼓部に

よる奉納太鼓も行われた。

［戦没者総合慰霊祭斎行］

平成十二年六月二十三日（慰霊の日）、戦没者総合慰霊祭を斎行した。正午の時報に合わせて黙祷がささげられ、斎主又吉宮司のもと、御遺族多数の列席の中、祭典が厳粛に執り行われた。

［殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）を斎行］

平成十二年八月十五日正午より、神社、英霊にこたえる会沖縄県本部主催による「みたま祭り」が斎行された。正午の時報に合わせて黙祷がささげられ、斎主又吉宮司によって御遺族、各種団体崇敬者列席のもと祭典が厳粛に執り行われた。

《これからの予定》

・平成十二年十月二十三日
「第四十二回秋季例大祭」
・平成十二年十一月十五日
「七五三詣で」（十一月中受け付け）
・平成十二年十一月二十三日
「新嘗祭」
・平成十二年十二月三十一日
「大祓式」・「除夜祭」
・平成十三年一月一日　「歳旦祭」
・平成十三年一月三日　「元始祭」
・平成十三年四月二十三日
「第四十三回春季例大祭」
・平成十三年六月二十三日
「戦没者総合慰霊祭」
・平成十三年八月十五日
「殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）」

永代祭祀のご案内

当神社では、春・秋の例大祭を始め六月二十三日の戦没者総合慰霊祭、八月十五日の殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）等種々の祭典を御奉仕し、戦争によって散華されたみたまをお慰め申し上げております。

また、各々の戦没者の御命日には神前にて永代命日祭を斎行致しております。

この永代命日祭は、御遺族からのお申し出により斎行されるもので、当神社では、沖縄県出身の戦没軍人・軍属並びに一般住民を始め、沖縄戦にて散華された本土出身戦没者の御遺族方からの永代祭祀申込みを受け付けております。

永代祭申込み後は、前もって御案内申し上げ、命日に祝詞を奏上し、御祭神の慰霊安鎮と御遺族の御繁栄を祈念致します。（御参列が無くても斎行致し、お供え物と御神札を郵送致します。）

なお、永代祭申込み初穂料は二万円以上となっております。詳しくは、当社社務所（電話〇九八―八五七―二七九八）までお問い合わせ下さい。

私の戦争体験記

「伊江島戦と私」

島袋　美代

私は十二才で伊江島戦に遭いました。

昭和十八年頃伊江島に飛行場建設が始まり、多数の兵隊さん達の来村それが、伊江島戦の始まりだったと思います。

私の家は母（四〇）、兄（一六）、兄（一四）、私（一二）、妹（一〇）の五人家族で、母と兄二人親子三人はレンプン工場で、働いて居りました。私と妹は学校へと貧しいその暮らしをしている我家に、家の角に赤い札が打こまれて居りました。

翌日突然兵隊さんが来て、「今から、滑走路に掛かるから、家を毀される事になりました。」との知らせが居りました。

三度の食事もやっとの、私達から、家迄も取り上げされ、東向きに建てられた小さな小屋に住家になりました。

―中略―

空襲（昭和十九年十月十日に行われた大規模な空襲で、筆者の家族も被害に会うが全員無事であった。：編者註）は終わっても七日間もナバルガマ（洞窟を利用した自然壕：編者註）に避難して、八日目にナバルガマを出ても帰る家はなく、私達家族五人は松山の側にムシロを敷いて、そこで一夜を明かしました。翌日も親子三人は工場に行き、私と妹はその場所で遊んでいると、兵隊さんが馬に乗って来て「君達はどこから来たのか」と聞かれました。私は、自分達の事を有りのままに話すと、「これは気の毒だ本当に可哀想だ」と言って兵隊さんは帰っていきました。

又翌日も兵隊さん達三十人ぐらい来て私達の家を建ててくれました。

何も知らない私達は嬉しい気持ちで一杯でしたが、母はその家を見て、何か心配そうでした。家の中から上を見ると空も見える家でした。

―中略―

十九年の秋に私達の隣に兵舎が建てられ、小坂一男一個小隊が来ました。その兵隊さん達も私達を可愛がり、兄妹の様な優しい兵隊さん達でした。その中に射場秀男さんは忘れる事は出来

米軍によって占領され、整備された伊江島飛行場

ません。私と妹に、毎朝前夜の残りご飯の中にお味噌を入れて、大きな焼きおにぎりを作って必ず持ってきてくれました。あの焼きおにぎりのおいしさは、今でも忘れる事が出来ません。あの優しい射場さんも二十年には、伊江島の土となり永遠に帰らぬ人となった。

私は十月十日の空襲後は学校にも行けず、城山（島の中央部にそびえる岩山で日本軍の陣地が築かれた。：編者註）に陣地掘り作業に行きました。

昭和二十年四月十六日の晩に（米軍が）伊江島に上陸したと、その夜に小坂小隊の兵隊さんから知らされました。小隊長は上陸した夜に戦死、兵隊さん達も何人かケガをしていたそうです。「上陸したから子供達を連れてどこにも出るな。戦争は兵隊との戦だ。住民との戦ではないから皆さん、体を大切にして一日も長く生き伸びなさい。」と云って別れた兵隊さん達も、一人残らず伊江島地で戦死者となりました。

（その後筆者とその家族全員は、米軍に収容され別の島にある収容所に送られ二年後に島に帰され、家族だけの生活がやっと始められることとなった。）

〈平成十一年三月三十一日、『伊江島の戦中・戦後体験記録』、伊江村教育委員会編集・発行より〉

遺族からの手紙

愛知県西春日井郡　高柳潔子様

陸軍伍長　高柳多喜男命（昭和二十年五月十日沖縄本島安波茶にて戦死）

前略　ご免下さい

戦後五十五年幾星霜、お忙しい中を命日祭のご案内いただきありがとうございました。

実のところ戦没者の父、昭和五十五年。弟（私の主人）平成六年。母まさを、平成八年に亡くなり佛様をお守りしているのは私一人となってしまいました。姑も亡くなるまで多喜ちゃん兄様とおまいりに行っておりました。遺族会からも三回位沖縄を訪ねていることと思っております。

多喜男氏の五十回忌を執り行なった年の冬、弟の靖男もガンで急死し、私

もご縁につながる者として一度御地を訪ねたいと願って居りましたところ、誘われて本島を訪問しました。ことし四月八日摩文仁の丘に走り寄り木曽川の水を持参親子四人の写真を供えました。私の知らない方ですが涙しました。風が強くローソクも線香も火がつかず帰路の飛行機の時間が一時三十分のため空港に向かいました。矢張りツアーは私個人の為ではなく。

でもお詣りしてお佛壇に報告した時はほんとうにうれしくて肩の荷が降りた気持ちです。靖国神社にも姑まさを名前の灯があげてあり父、母の若々しく二度と帰らなかった息子に対する切ない気持ちは戦争を体験している者のみの知ることと思っておりました。語りつぎ受けついでこうして永代供養のご案内を頂けたこと本当に有難うございました。

墓標を去るとき、このような淋しい土地に悲しい土地に二度と来ることはないと考えておりました。せめて靖男が生きていたら沖縄本島の安波茶の砂でも頂いて帰ったことでしょう。地名に安波茶は見当りません。

折角そのつもりで沖縄へ行ったのだから別行動して護国神社に参拝すべきでしたが、何の知識もなく今となって申し訳なかったとお詫びしております。

失礼とは存じましたが寸志同封させて頂きます。どうか榊料としてお取り次ぎ頂けましたら幸せでございます。ご多忙の中勝手を申しお許し下さいませ。

四月二十五日

沖縄県護國神社
執事様

高柳　潔子

平成十一年度永代祭申込者御芳名

新規永代祭申込み者

・大阪府　松谷アイ子様
・久士十一期海上挺身鎮魂碑奉賛会様
・北海道　岩田軍一様
・北海道　遠藤末治様
・北海道　蔦屋正栄様
・茨城県　青柳君江様

命日祭御供奉納者芳名（重複掲載有り）

・群馬県勢多郡大胡町　江原はつ子様
・北海道古宇郡泊村　澤田政枝様
・愛知県一宮市　原江つ様
・神奈川県横浜市南区　久保井淑子様
・北海道茅部郡南茅部町　佐藤武司郎様
・北海道札幌市西区　浅田節子様
・沖縄県那覇市　平良カマド様
・北海道札幌市東区　鳴海美栄子様
・北海道札幌市西区　桜井朋子様
・北海道　山崎憲一朗様
・三重県津市　吉川つや子様
・佐賀県伊万里市　條島源吾様
・北海道函館市　伊藤和子様
・大分県玖珠郡玖珠町　中島美千代様
・岐阜県岐阜市　松波一男様
・岩手県盛岡市　瀬川淳様
・北海道札幌市中央区　三村一徳様
・三重県南牟婁郡御浜町　東すゑの様
・神奈川県横浜市神奈川区　松本敬子様
・北海道札幌市中央区　黒川善一様
・千葉県千葉市若葉区　布施茂様
・山口県宇部市　上田喬様
・北海道札幌市西区　浅田興屋様
・奈良県天理市　切田京子様
・福岡県大牟田市　小柳昌敏様
・山梨県甲府市　佐藤ひでの様
・愛知県海部郡八開村　野口蜜雄様
・神奈川県横浜市南区　高津菊枝様
・福岡県春日市　大橋温子様
・愛知県岡崎市　加藤志づ様
・愛知県豊橋市　杉浦文子様
・岩手県花巻市　瀬川タエ様
・北海道上川郡剣淵町　阿部辰巳様
・滋賀県栗太郡栗東町　堀池四郎様
・熊本県山鹿市　岡部ハツ子様
・北海道札幌市中区　鈴木ナカ子様
・岡山県岡山市　田淵昭人様
・愛知県豊橋市　牧　清様
・北海道根室市　松原マツ様
・沖縄県那覇市　仲村致慶様
・東京都江戸川区　岡田昌久様
・福岡県甘木市　山崎肇様
・愛知県稲沢市　川口日出様
・神奈川県横浜市　山本太一郎様
・和歌山県那賀郡町田東　藤川嘉寿子様
・奈良県生駒市　荒川文子様
・北海道苫前郡苫前町　土田千代様
・北海道札幌市北区　北村孝子様
・広島県広島市安佐南区　児玉光晴様
・岡山県津山市　石川美芳様
・岡山県岡山市　羽布津麗子様
・神奈川県藤沢市　辻　功様
・東京都荒川区　川俣トク様
・熊本県熊本市　松尾雪子様
・愛知県海部郡大治町　気田くわ様
・宮城県黒川郡富谷町　菅原秀子様
・佐賀県三養基郡中原町　立石博義様
・大阪府堺市　恵親也様
・東京都中野区　佐々木禎助様
・愛媛県松山市　梅田光枝様
・滋賀県甲賀郡水口町　宿谷長次様
・福島県二本松市　安田信吉様
・愛知県岡崎市　内藤はる子様
・北海道河西郡芽室町　森正子様
・愛知県豊橋市　小野すみゑ様
・愛知県名古屋市中川区　鬼頭しげ子様
・北海道北見市　十良沢義治様
・北海道札幌市東区　鳴海美栄子様
・岐阜県恵那郡福岡町　岡山孝平様
・千葉県市川市　松永修巳様
・沖縄県那覇市　与那嶺文子様
・北海道札幌市東区　加藤勤様
・愛知県名古屋市天白区　近藤義文様
・福岡県柳川市　中川小夜子様
・北海道札幌市西区　植松香様
・兵庫県尼崎市　中島信子様
・沖縄県北谷町　伊禮和枝様
・愛知県稲沢市　下田方子様
・沖縄県浦添市　濱松昭様
・愛知県津島市　加藤恵一様
・沖縄県宜野湾市　宮城永都子様
・沖縄県那覇市　安里積貞様
・沖縄県那覇市　川田江勇様
・沖縄県浦添市　上原艶子様
・群馬県高崎市　深町フジノ様
・沖縄県南風原町　宮良慎次様
・沖縄県北谷町　照屋秀様
・沖縄県中城村　宮平オトメ様
・愛知県小牧市　橋本かや様
・沖縄県那覇市　仲村致慶様
・北海道根室市　松原マツ様
・三重県松阪市　野村一子様
・沖縄県那覇市　高江洲愛子様
・熊本県天草郡松島町　小島勤二様
・北海道函館市　福澤一蔵様
・愛知県刈谷市　丹村きり様
・佐賀県杵島郡江北町　千綿ミエ子様
・沖縄県那覇市　高江洲愛子様
・東京都武蔵村山市　渡辺三郎様
・北海道札幌市白石区　桜田スミ子様
・北海道　水上泰正様
・北海道札幌市中央区　黒川善一様
・北海道余市町　木村シズ子様
・福井県福井市　松山玉子様
・山口県宇部市　平原清忠様
・北海道足寄郡足寄町　大竹口重幸様

社務日誌抄（平成十一年九月より平成十二年八月まで）

九月

・四　日　青年ふるさとエイサー祭り
　　成功祈願
・七　日　知念村戦没者慰霊祭
・二五日　皇學館大學臼山芳太郎教授
　　本澤雅史助教授正式参拝

十月

・四　日　那覇まつり成功安全祈願祭
・一七日　神宮神嘗祭
・一九日　岩手県遺族連合会正式参拝
・二三日　沖縄県産業まつり成功安全
　　祈願祭
・二二日　群馬県遺族の会正式参拝
・二三日　第四十一回秋季例大祭
・二七日　岡山県遺族連盟正式参拝
・二九日　東京都遺族連合会正式参拝

十一月

・四　日　鳥取県遺族会正式参拝
・四　日　福島県遺族会正式参拝
・五　日　山口県遺族連盟正式参拝
・八　日　山梨県遺族会正式参拝
・九　日　静岡県遺族会正式参拝
・一〇日　長崎県連合遺族会正式参拝
・一〇日　熊本県遺族連合会正式参拝
・一〇日　北海道遺族連合会正式参拝
・一〇日　岐阜県遺族会正式参拝
・一一日　広島県遺族会正式参拝
・一一日　高知県遺族会正式参拝
・一二日　新潟県護國神社正式参拝
・一四日　三重県遺族会正式参拝
・一五日　奈良県遺族会正式参拝
・一六日　福井県遺族連合会正式参拝
・一七日　富山県遺族会正式参拝
・一九日　茨城県遺族連合会正式参拝
・二四日　佐賀県遺族会正式参拝
・二四日　青森県遺族連合会正式参拝
・二四日　埼玉県遺族連合会正式参拝
・二四日　和歌山県遺族連合会正式参拝
・二五日　立山町遺族会正式参拝
・二五日　神奈川県遺族会正式参拝

十二月

・一一日　千葉県遺族会正式参拝
・三一日　大祓式・除夜祭

一月

・一　日　歳旦祭
・三　日　元始祭
・二一日　熊本県本渡諏訪神社宮司大
　　野康孝氏正式参拝
・二九日　航空自衛隊那覇基地救難隊
　　太鼓部新年奉納太鼓

二月

・一七日　祈年祭
・一九日　山形県神社庁正式参拝
・二一日　京都の塔奉賛会正式参拝
・二一日　修養団正式参拝
・二二日　豊橋第十期慰霊祭斎行
・二三日　新潟県神道青年協議会正式参拝
・二三日　熊本県天草神道青年会正式参拝

三月

・四　日　久士十一期海上挺身鎮魂
　　碑慰霊祭奉仕

四月

・一　日　ムーンビーチ海開き安全祈願祭
・二一日　沖縄県石川市遺族会正式参拝
・二二日　霊璽簿奉安祭・宵宮祭
・二三日　第四十二回春季例大祭斎行

五月

・九　日　神奈川県神道青年会正式参拝
・一五日　祖国復帰記念祭
・二九日　滋賀県遺族会正式参拝

六月

・一三日　いわお戦友会慰霊祭奉仕
・一七日　しづたまの碑慰霊祭奉仕
・二一日　北海道旭川睦会正式参拝
・二二日　大分県神道青年会正式参拝
・二二日　埼玉県遺族連合会壮年部正式参拝
・二二日　沖縄戦戦没者総合慰霊祭斎行
・二三日　大祓式
・三〇日

七月

・三　日　陸上自衛隊第一混成団長兼那覇駐屯地
　　司令廣瀬誠様着任報告祭

八月

・一五日　殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）斎行
・一七日　群馬県遺族の会青少年正式参拝
・一七日　高知県遺族会青少年正式参拝
・二六日　青年ふるさとエイサー祭り
　　成功安全祈願祭

今に残る激戦の跡

「宜野湾市嘉数高地」

この沖縄本島中部に位置する宜野湾市の嘉数高地は、沖縄戦当時最も過酷な戦闘が行われ、日米両軍共に多くの死傷者を出した地である。

昭和二十年四月一日沖縄本島中部西海岸に上陸した米軍に対し、我第三十二軍沖縄守備隊は持久作戦を執り、対峙したままの状態が続いていた。

那覇市首里に司令部を置く第三十二軍は、本島西海岸に位置する牧港・嘉数、中央部に位置する我如古、東海岸の和宇慶の線で防衛ラインを構築していたが、四月七日頃からいよいよ米軍が押し迫り、ついに本格的な白兵戦へと突入していった。その中でも嘉数高地は、西に牧港、東は街道を経て西原高地へと繋がっており、特に重要な地として第六十二師団（藤岡武雄中将二十三期東京都出身）、独立歩兵第十三大隊（原宗辰大佐二十六期）によって洞窟陣地が敷かれ、連日激しい戦闘が行われた。

四月九日早朝、米軍歩兵部隊は奇襲をかけ嘉数高地頂上を目指して侵攻してきた。それに対し、我が軍は迫撃砲にて反撃を繰り返し米軍を撃退したほか、一時確保された嘉数西側七〇高地をも奪還した。

四月十日、この日も嘉数の陣地に米軍が攻勢をかけ、今度は砲撃を集中させたあと、歩兵部隊が頂上を目指し進撃してきた。守備隊は必死に応戦し高地北側正面は確保したものの、前日奪還した西側七〇高地の頂上部分と北側斜面が占領された。

四月十一日、前日に引き続き米軍は西側七〇高地から南側へ進出しようとしたが、守備隊によって撃退された。

このように一進一退の攻防戦が連日行われ、我が守備隊は少ない装備ながら的確な砲撃と、守備により同高地を

嘉数高台南側にある洞窟陣地入口

死守し続けた。

この戦闘により米軍は死者行方不明者三百二十六名を出し、米第一大隊長は更迭され、十五日から十八日にかけ兵力の増強と軍需品を集積し決死の覚悟で高地奪還に備えた。

一方守備隊も嘉数陣地守備強化のため新たな部隊編制を行い、来たる米軍との戦闘に備えた。

四月十九日米軍は約三〇両の戦車を連ね攻撃を加えてきた。これに対し我が方は速射砲、連射砲等で反撃するとともに、歩兵が爆弾箱を抱え戦車に体当たりする戦法もとられ、それによって戦車二十二両が破壊された。それは、沖縄戦の一戦闘における最大の戦果であった。その日の戦闘により米軍は一五八名の戦死者を出した。しかし守備隊も多大な被害をこうむり、戦闘能力はかなり低下した。

嘉数高台を北東側から望む

頂上に建立されている京都の塔（他にも多くの慰霊の塔あり）

その後二十三日まで守備隊により死守された嘉数高地であったが、司令部の判断により戦線のたて直しが図られ、部隊は後方へと移動し四月二十四日ついに嘉数高地は米軍によって占領された。

この戦いによって日米双方は共に多数の死傷者を出し疲弊した。また、この攻防戦には嘉数の住民も弾薬運搬などに従事し三七四名の戦死者を出した。

守備隊のトーチカ（砲撃により正面が破壊されているが、右側の銃眼はそのまま残っている。）

皇居勤労奉仕に参加して

沖縄県護國神社
権祢宜　島仲　彌
七十五歳

平成十二年四月十日より十五日にかけて、沖縄県神社庁主催の皇居勤労奉仕に参加した。

十日早朝、那覇空港を出発した奉仕団三八名（団長新垣義夫普天間宮宮司）は、羽田空港へ到着。早速バスにて歴代の天皇が祀られている武蔵御陵へと向かい、同地参拝の後靖國神社へ到着した。靖國の大鳥居をくぐった時、自然とそこに祀られている全国の英霊に対し頭が下がり、また境内の桜の花が我々を歓迎してるかのように満開に咲き誇っていたのがとても印象的であった。

正式参拝を済ませ、先の大戦にて使用された兵器、英霊の遺品を展示した「遊就館」を見学。そこに展示された品々を観ると戦争当時のことを思い出し胸がいっぱいとなってしまった。

二日目、早朝ホテルを出発。徒歩にて皇居に向かう。宮内庁職員から皇居での注意事項が説明され、いよいよ皇居内へと通された。担当職員から皇居内部の説明を受けながら担当地区へと向かった。途中陛下ご自身が種もみをお手まきになる稲代や、新嘗祭にお供えされる稲が植えられる水田、そして皇后陛下の御養蚕所を見ることができた。

午前中は主に皇居内の見学で終わり、午後から半蔵門、吹上御苑内の道路を清掃することとなった。作業は比較的軽く、三十分程清掃し二十分休むという内容であった。午後三時前に作業は終了し、他府県からやってきた団体総勢四三〇名と共に皇居を後にした。

翌日、翌々日共に皇居内見学を兼ねた軽作業をこなし、皇居内のすばらしさを体感することができた。そのような中、ご奉仕中に実現した天皇、皇后両陛下並びに、皇太子、同妃両殿下とのご拝謁は一生忘れられない思い出となった。

皇太子、同妃両殿下とのご拝謁は奉仕三日目に東宮御所玄関前にて行われ、両殿下は一列に並んだ各団体の長の前にゆっくりとお進みになり、一言づつお声をお掛けになられた。わたしは団長のすぐ後方にいたため、目の前でのご拝謁となった。

「天皇、皇后両陛下とのご拝謁は勤労奉仕最後の日である四日目に実現した。午前中皇居内見学の後、皇居蓮池前参集所にて天皇皇后両陛下のご台臨を仰いだ。

両陛下は、紀宮殿下とご一緒に出御

遊ばされ、各団体の団長から各々の団体についての説明をお受けになり、それぞれの団体にねぎらいの言葉をお掛けになられた。なかでも我々沖縄からの団体には、より多くのお言葉が掛けられたと思われる。わたしは、前日の皇太子、同妃両殿下とのご拝謁と同様団長のすぐ後方にいたため、間近でのご拝謁となり、感動で胸いっぱいであった。

その日は旧三の丸、大手門付近を清掃し、三時過ぎ頃にすべての作業を終了した。皇居を後にした我々一行は、そのままバスにて栃木県の鬼怒川温泉へと移動。温泉にて疲れを癒し、翌日日光東照宮を正式参拝し、華厳の滝を見学。夕刻羽田空港にて解散式を済ませ空路沖縄那覇へ到着し、この実り多い旅が終了した。

お知らせ

【車イス用スロープの設置】

平成十一年十二月、神社神楽殿横にスロープが設置され、車イスの方でも参拝できるようになりました。

これは近年遺族の方々がご高齢になられ、神社参拝にも支障をきたすケースが多く見られることから、足の不自由な方でも気軽に社殿近くまで進むことが出来るようにとの事で、沖縄県出店業組合（代表政田幸男）の奉仕により設置されたもの。以来足の不自由なお年寄りや障害者から気軽に参拝できるようになったと喜ばれています。

【桜の献木】

愛知県松山市在住の河本カヲル様より、桜の木が奉納されました。河本様は、英霊への感謝と慰霊顕彰のため靖國神社を始め全国の護國神社へ桜の木を奉納されており、特に当神社へは沖縄戦にて散華された全国の英霊を祀る社（やしろ）として、深い思いをもって奉納がなされました。

奉納された桜の木は、沖縄の気候に適した「寒緋桜」で、神社参道横に植樹され、来る一月には濃い色の花を咲かすことと思われます。

【『沖縄県護国神社の歩み』発刊】

護國神社では、昭和四十年の本殿・拝殿再建から三十五年を迎える今年、神社復興から現在までの社頭の移り変わりを記録としてまとめ、復興に尽力された方々の努力を後世に残すべく『沖縄県護国神社の歩み』を刊行致しました。

同書は全部で六章から構成されており、沖縄戦終結以降廃墟に帰した当神社の歩みを、当時の写真や記録を交えながら詳録したもので、今年七月半ばに県内外の関係者へ贈呈致しました。まだ若干の在庫がございますので、所望される方は神社社務所までご連絡下さい。

【『伊勢神宮参宮旅行』参加のお知らせ】

神社では沖縄県神社庁（波上宮内）主催の「伊勢神宮参宮旅行」への参加者を募っております。この旅行では関係職員が伊勢神宮内を案内し、御垣内参拝、域内別宮参拝、御神楽の奉納など一般では味わえない特色有る旅行内容となっております。ぜひとも参加下さいますようご案内申し上げます。また、皇室に関する正しい情報や皇室のご動静、そして日本の文化を広く伝えることを目的とした季刊誌（年四回発刊）、『わたしたちの皇室』（発行／主婦と生活社）の定期購読申し込みも募集致しております。合わせてご検討の程よろしくお願い致します。詳しくは神社社務所までお問い合わせ下さい。

編集後記

・念願の護國神社社報「うむい」創刊号をお届けいたします。

・本紙発刊の主旨である、戦争によって亡くなっていった人達、その遺族、戦友等の思いを後世へと伝えていくことを念頭に、これから年一回発刊していく予定であります。

発　行　平成十二年十月一日
発行所　沖縄県護國神社
〒九〇〇―〇〇二六
沖縄県那覇市奥武山四四番地
ＴＥＬ〇九八―八五七―二七九八
ＦＡＸ〇九八―八五七―七九一七
編集担当　加治　順人
印刷所　㈲うるま印刷